岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 146

小 松 遺 跡 ほ か

県営北房町圃場整備事業に伴う確認調査

1 9 9 9

岡 山 県 教 育 委 員 会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告146

小松遺跡ほか

県営北房町圃場整備事業に伴う確認調査

1999

岡山県教育委員会

序

本書は上房郡北房町上水田に所在する小松遺跡ほかの確認調査報告書です。

この調査は県営北房町圃場整備事業に先だち、事業予定地内にある埋蔵文化財の基礎資料を得て、埋蔵文化財の保護・保存と圃場整備事業との調整を図るため、平成10年度国庫補助事業として行われたものです。

北房町は岡山県の中北部、吉備高原の一角に位置します。今回調査の対象となった上水田地区は備中北部有数の穀倉地帯で、町の中央を東西に流れる備中川とその支流中津井川によって形成された広大な平野が広がっています。

また、付近にはこの地域の拠点的な集落遺跡である谷尻遺跡、備中北部唯一の白鳳寺院である英賀廃寺、英賀郡衙と推定される小殿遺跡などが所在し、周囲の丘陵上には古墳時代前期では荒木山東塚・西塚古墳、古墳時代中期では岡山県北部で最大級の前方後円墳である立１号墳が築かれるなど、豊かな農業生産力によって支えられた重要な遺跡が存在します。

調査の結果、丘陵の裾部を中心に弥生時代から中世の遺構・遺物を確認するとともに、備中川右岸に縄文時代中期から弥生時代前期にかけて形成されたと考えられる微高地を確認しました。また、小松川の流れる谷部では古代の瓦片が出土しており、周辺に寺院または瓦窯の存在が想定されます。

これらの調査成果を収載した本書が、学術研究に寄与するのみならず、地域の歴史や文化財の保護・活用の一助となれば幸いと存じます。

最後に発掘調査および報告書作成にあたり、文化庁文化財調査官ならびに北房町役場、北房町教育委員会、地元地権者の皆様から賜りました種々の御指導と御支援に対し、厚くお礼申し上げます。

平成11年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　葛原克人

例　言

1　本報告書は岡山県上房郡北房町上水田における県営圃場整備事業に伴い、岡山県教育委員会が平成10年度国庫補助を受け、岡山県古代吉備文化財センターが確認調査を実施した小松遺跡ほかの発掘調査報告書である。

2　小松遺跡ほかは上房郡北房町上水田1450-1ほかに所在する。

3　確認調査は岡山県古代吉備文化財センター職員佐藤寛介が担当し、平成10年10月８日から12月２日まで実施した。その調査面積は340㎡である。

4　確認調査にあたり、文化庁文化財調査官の小林　克氏から有益な御指導、御助言をいただいた。記して深く感謝の意を表する次第である。

5　本報告書の作成・執筆・編集は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて佐藤が行った。

6　報告書の作成についてはセンター職員の方々の協力を得た。遺物写真の撮影については江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。

7　確認調査・報告書作成にあたり、下記の機関・諸氏から御支援・御助言をいただいた。記して厚くお礼申し上げる次第である。

　高梁地方振興局、北房町役場、北房町教育委員会、地元地権者の方々。

8　本報告書に関係する出土遺物ならびに図面・写真等のうち、北房町教育委員会が調査を行ったものについては北房町教育委員会において保管しており、それ以外については岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

凡　例

1　本報告書に用いた高度は海抜高であり、圃場整備事業に伴い設置されたベンチマークの海抜高を利用した。また、北方位は第１・２・４・５・38図が真北で、その他は磁北である。調査地周辺の磁北は西偏約７度０分を測る。

2　本報告書の遺構および遺物実測図の縮尺は遺構は１/80、遺物は１/４に統一している。また、遺物写真については１/２に統一している。

3　本報告書に掲載した遺構実測図で土層断面のみ掲載したものについては、トレンチの方位を以下のように略して付している。

東：E（East）　西：W（West）　南：S（South）　北：N（North）

4　本報告書に掲載した遺物には通し番号を付している。土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのある図は口径の不確かなものである。また、小片の土器が多いため傾きの不確かなものが多い。

5　本報告書に掲載した地図のうち、第２図は国土地理院発行の１/25,000地形図「呰部」を複製・加筆したものである。また、遺跡の位置と名称については『北房町史』通史編上（北房町教育委員会1992年）に掲載されている遺跡分布図を基本に、近年の調査・研究成果を盛り込み作成した。

本文目次

序
例言
凡例
目次
第１章　調査および報告書作成の経緯と体制 …… 1
　第１節　調査にいたる経緯 …… 1
　第２節　調査・報告書作成の体制 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
第３章　発掘調査の概要 …… 6
　第１節　調査区の設定と調査方法 …… 6
　第２節　調査の概要 …… 9
第４章　まとめ …… 21

図目次

第１図　北房町の位置（1/200,000） …… 3
第２図　調査地周辺の地形と主要遺跡（1/25,000） …… 4
第３図　北房町教育委員会調査トレンチA出土遺物（1/4） …… 6
第４図　調査地周辺の小字地名（1/12,000） …… 7
第５図　トレンチ配置図（1/8,000） …… 8
第６図　T-1平・断面図（1/80） …… 9
第７図　T-3平・断面図（1/80） …… 9
第８図　T-4平・断面図（1/80） …… 10
第９図　T-6断面図（1/80） …… 10
第10図　T-7断面図（1/80） …… 10
第11図　T-8断面図（1/80） …… 11
第12図　T-9断面図（1/80）・出土遺物（1/4） …… 11
第13図　T-10断面図（1/80）・出土遺物（1/4） …… 11
第14図　T-11断面図（1/80）・出土遺物（1/4） …… 12
第15図　T-12平・断面図（1/80） …… 12
第16図　T-13断面図（1/80） …… 12
第17図　T-14断面図（1/80） …… 12
第18図　T-15断面図（1/80）・出土遺物（1/4） …… 13
第19図　T-16平・断面図（1/80）・出土遺物（1/4） …… 13
第20図　T-17断面図（1/80）・出土遺物（1/4） …… 14
第21図　T-18断面図（1/80）・出土遺物（1/4） …… 15
第22図　T-19断面図（1/80） …… 15
第23図　T-20断面図（1/80） …… 15
第24図　T-21断面図（1/80）・出土遺物（1/4） …… 15
第25図　T-22断面図（1/80）・出土遺物（1/4） …… 16
第26図　T-23断面図（1/80） …… 16
第27図　T-24断面図（1/80） …… 16
第28図　T-25断面図（1/80） …… 16
第29図　T-26断面図（1/80）・出土遺物（1/4） …… 17
第30図　T-27断面図（1/80） …… 17
第31図　T-28断面図（1/80） …… 17
第32図　T-29断面図（1/80）・出土遺物（1/4） …… 17
第33図　T-30平・断面図（1/80）・出土遺物（1/4） …… 18
第34図　T-31断面図（1/80） …… 19
第35図　T-32断面図（1/80） …… 19
第36図　T-33断面図（1/80） …… 19
第37図　鍛冶屋ヶ市地区周辺採取遺物（1/4） …… 19
第38図　遺跡推定範囲図（1/8,000） …… 21

表 目 次

第１表　トレンチ調査概要一覧表 …… 22

図版目次

図版１－１．調査地遠景①(北西から)
２．調査地遠景②(北東から)
３．調査地遠景③(南から)
図版２－１．Ｔ－３全景(南東から)
２．Ｔ－３土壙２(東から)
３．Ｔ－４溝(北西から)
図版３－１．Ｔ-16全景(西から)
２．Ｔ-30全景(北西から)
３．Ｔ-30畦畔痕跡検出状況(西から)
図版４－１．Ｔ－１北壁たわみ周辺(南から)
２．Ｔ－７東壁北半(西から)
３．Ｔ－９東壁(西から)
４．Ｔ-10全景(南西から)
図版４－５．Ｔ-11北壁東壁(南から)
６．Ｔ-12北壁溝周辺(南から)
７．Ｔ-15北壁東半(南から)
８．Ｔ-17北壁(南から)
図版５－１．Ｔ-20全景(南東から)
２．Ｔ-22北壁西半(南から)
３．Ｔ-26全景(南西から)
４．Ｔ-28東壁南半(西から)
５．Ｔ-29全景(南西から)
６．Ｔ-33全景(南西から)
７．作業風景(Ｔ-30　北東から)
８．埋め戻し風景(Ｔ-17　南西から)
図版６　出土遺物(１/２)

第１章　調査および報告書作成の経緯と体制

第１節　調査に至る経緯

上房郡北房町上水田南部地区36.8haを対象に県営圃場整備事業（担い手育成基盤整備事業）が計画されたことに伴い、平成９年６月、岡山県教育委員会と高梁地方振興局による協議を行った。

この結果、当該地内に接する丘陵裾部には小松遺跡、立遺跡など周知の遺跡が所在するほか、現地形の検討から備中川右岸に微高地が形成されている可能性が考えられたため、事業予定地内全域について工事着工に先立ち確認調査を実施することとなった。

この協議に基づき、岡山県教育委員会では工事施工前に遺跡の規模や性格、状況等を明らかにし、遺跡保存のための基礎資料を得るため、平成10年度に国庫補助を受けて確認調査を実施することとした。

この協議の後、北房町教育委員会では高梁地方振興局からの委託を受け、平成９・10年度施工範囲となる13haについて確認調査を実施した。

そのため、岡山県教育委員会が確認調査を実施する対象範囲は残る23.8haとなった。

第２節　調査・報告書作成の体制

確認調査は岡山県古代吉備文化財センターが岡山県教育委員会の依頼を受け、文化庁文化財調査官の指導・助言を得て、平成10年10月８日から12月２日まで実施した。また、整理・報告書の作成は12月３日より岡山県古代吉備文化財センターにおいて調査担当者があたった。

調査・整理体制

岡山県教育委員会

教 育 長	黒瀬　定生
岡山県教育庁	
教育次長	平岩　　武
文化課	
課　　長	髙田　朋香
課長代理	西山　　猛
参　　事	正岡　睦夫
課長補佐（埋蔵文化財係長）	松本　和男
主　　事	三宅　美博

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	葛原　克人
次　　長	大村　俊臣
〈総務課〉	
総務課長	小倉　　昇
課長補佐（総務係長）	安西　正則
主　　査	山本　恭輔
〈調査第一課〉	
課　　長	高畑　知功
課長補佐（第一係長）	中野　雅美
文化財保護主事	佐藤　寛介（調査・整理担当）

報告書作成協力者

松尾　和子

日誌抄

平成10年10月８日　発掘調査開始。Ｔ-32･33掘り下げ開始。
10月９日　Ｔ-29･31掘り下げ開始。
10月13日　Ｔ-30掘り下げ開始。レベル杭の打設。
10月16日　台風10号来襲のため、シート･テントの保全作業を行う。
10月19日　Ｔ-24･26･27掘り下げ開始。Ｔ-33写真撮影。Ｔ-29･31実測
10月20日　Ｔ-25掘り下げ開始。Ｔ-32写真撮影。Ｔ-32･33実測。
10月21日　Ｔ-23掘り下げ開始。Ｔ-24･27写真撮影。Ｔ-24実測。
10月22日　Ｔ-22掘り下げ開始。Ｔ26･28写真撮影。Ｔ-24実測。
10月23日　Ｔ-20掘り下げ開始。
10月28日　Ｔ-40掘り下げ開始。
10月29日　Ｔ-２・３・５掘り下げ開始。Ｔ-２・５写真撮影。遺跡遠景写真撮影。
10月30日　Ｔ-１・４・６掘り下げ開始。Ｔ-６・８・10･25写真撮影。
平成10年11月２日　Ｔ-７掘り下げ開始。Ｔ-２・５埋め戻し。
11月４日　Ｔ-11･12･13掘り下げ開始。
11月５日　Ｔ-13･14掘り下げ開始。Ｔ-１・４・７写真撮影。レベル杭打設。
11月６日　Ｔ-15掘り下げ開始。Ｔ-20･21･22写真撮影。Ｔ-７・８・10実測。
平成10年11月９日　Ｔ-16掘り下げ開始。Ｔ-４・７・16写真撮影。
11月10日　Ｔ-１・４・６・７・25･26･28実測。
11月11日　Ｔ-17･18掘り下げ開始。遺跡遠景写真撮影。
11月12日　Ｔ-14･15･20･21･22実測。レベル杭の打設。
11月13日　Ｔ-30拡張。Ｔ-13･14･15写真撮影。
11月16日　Ｔ-９掘り下げ開始。Ｔ-３・11･12写真撮影。Ｔ-28埋め戻し。
11月17日　Ｔ-19掘り下げ開始。Ｔ-９・17･18写真撮影。
11月18日　Ｔ-19･23実測。Ｔ-29･31･32埋め戻し。文化庁文化財調査官視察。
11月19日　Ｔ-30写真撮影。Ｔ-９・30実測。Ｔ-19･23･24･27･25埋め戻し。
11月20日　Ｔ-３・11･16実測。Ｔ-10･21･22･30埋め戻し。
11月24日　Ｔ-12･13･17･18実測。Ｔ-４・６・７・８埋め戻し。
11月25日　Ｔ-１・３・９・11･16埋め戻し。
11月26日　遺跡遠景写真撮影。Ｔ-12･13･14･15埋め戻し。
11月27日　Ｔ-17･18･20･26埋め戻し。
平成10年12月１日　Ｔ-33埋め戻し。道具の清掃。
12月２日　発掘資材の撤収。発掘調査終了。

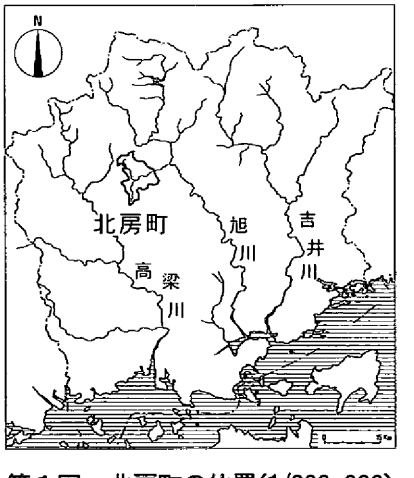
第２章　遺跡の位置と環境

小松遺跡ほかは岡山県の中北部、上房郡北房町上水田に所在する。町域は中国山地に連なる吉備高原に囲まれた盆地状を呈し、丘陵部には上房台と呼ばれる石灰岩台地が大きく広がっていることから、カルスト地形がみられるとともに洞穴や岩陰が点在している。平野は河川の流域を中心に形成されており、大きくは備中川上流部の呰部地区、中津井川流域の中津井地区、そして備中川と中津井川が合流し、備中川がその流れを大きく変えて東流する上水田地区に分けることができる。このうち、呰部地区と中津井地区では河川に沿って狭長な平野が形成されているのに比べ、今回調査の対象となった上水田地区には備中川両岸にまとまった平野が広がっている。また、北房町域は古代以降の行政区画では備中に属しているが、地理的には町内を流れる備中川が旭川の支流であることから美作地方との結びつきが強い。さらに、陸路では北は阿哲郡、東は真庭郡、南は高梁市・総社市など備中中心部と結ばれた、備中北部における交通の要衝といえる[1]。こうした地理的環境から、北房町内には他地域との関係の中で培われた、独自のまとまりをもつ地域社会が形成されていくことになる。

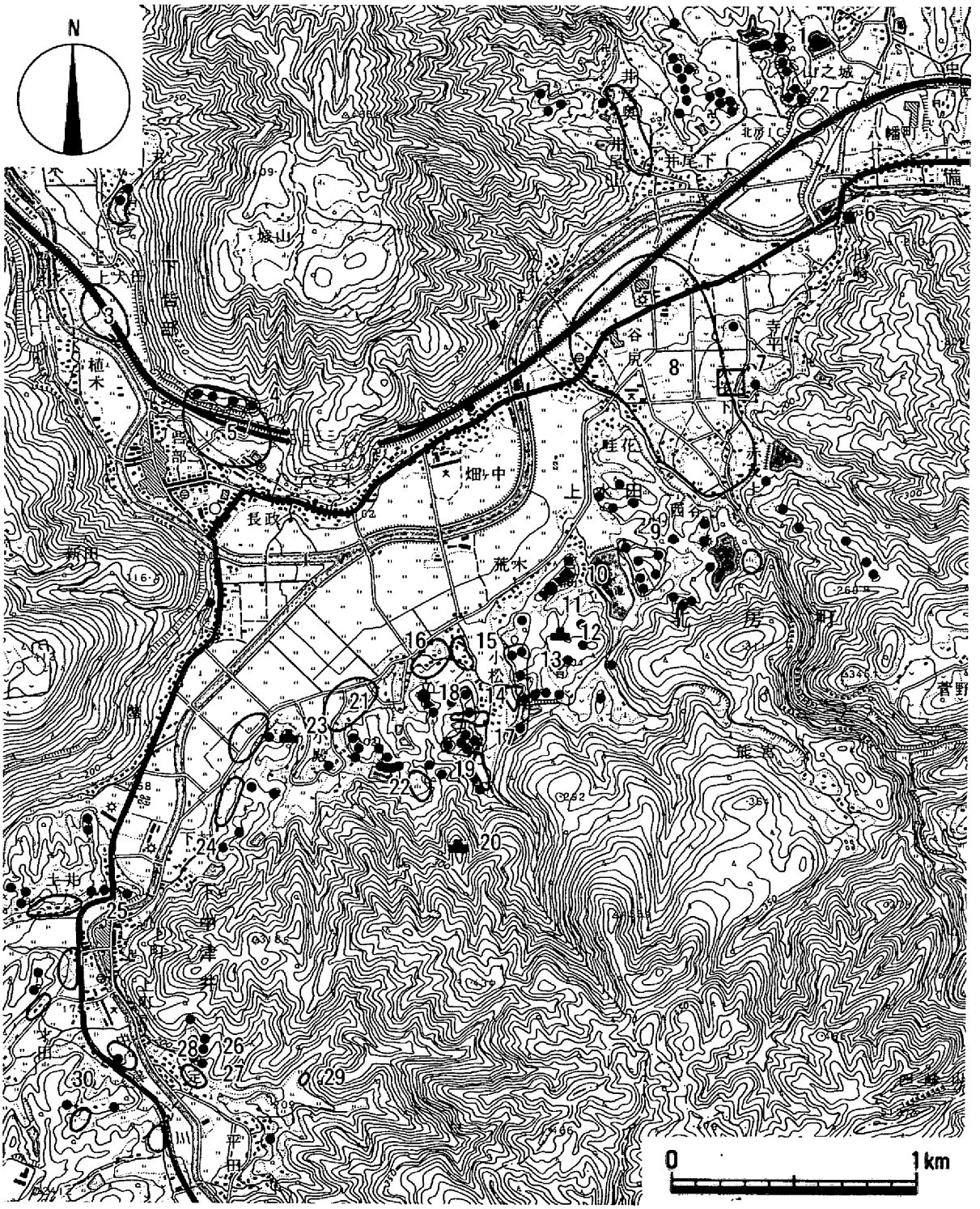
現在のところ北房町内では先土器時代の遺物は発見されておらず、町内における最古の遺物は備中平遺跡[2]、谷尻遺跡[3]、空古墳[4]、定北古墳[5]の調査で出土した縄文時代早期の押型文土器である。続く縄文時代前・中・後期の遺物は谷尻遺跡、桃山遺跡[6]などでわずかに認められるだけで、大きな空白期間となっている。晩期になると谷尻遺跡で谷尻式と型式設定された晩期中葉の土器とともに多量の石鏃、石包丁状削器など稲作農耕に関連する遺物が出土している。また、特徴的なものとして縄文時代中期から晩期の遺物が出土した地蔵ヶ淵洞穴[7]など、町内に点在する岩陰や洞窟を利用した洞穴遺跡がある。

続く弥生時代のうち、弥生時代前期は谷尻遺跡で遺物が少量出土しているだけで、その実体は全く不明である。弥生時代中期には丘陵裾部を中心に若干の遺物散布地が認められるようになるが、集落の様相など不明な点が多い。弥生時代後期には遺跡数が増加し、谷尻遺跡・桃山遺跡などまとまった集落が営まれるようになる。特に谷尻遺跡はこの地域の拠点集落と考えられ、発掘調査により畿内からの移住を思わせる多量の畿内系土器や、首長居館と推定される１辺12mを測る方形壁立式竪穴住居など、地域間の交流や集落構成を考える上で貴重な成果が得られている。また、祭祀遺跡として水辺の祭祀が行われたと考えられる矢の内遺跡がある。

古墳時代には現在の集落域とほぼ重なる程度まで遺跡が拡大している状況が伺え、谷尻遺跡・桃山遺跡・備中平遺跡では発掘調査により集落の様相が明らかにされている。また、上水田地区を中心に約200基もの古墳が築かれる。上水田地区を臨む低丘陵上には、古墳時代前期から中期にかけて荒木山東塚古墳、荒木山西塚古墳、そふづぶう古墳、立１号墳と継続的に首長墳が築かれている[8]。古墳時代後期になると首長墳は呰部地区や中津井地区に築かれるようになる。特に中津井地区には古墳時代後期から終末期にかけて定東塚古墳[9]、定西塚古墳[10]、定北古墳、大谷１号墳[11]と継続して首長墳が築造され、一連の発掘調査によりその詳細が明らかに



第１図　北房町の位置(1/200,000)



1．小田鼻古墳	2．山之城古墳群	3．植木遺跡	4．桃山古墳群	5．桃山遺跡
6．地蔵ケ淵洞穴	7．英賀廃寺	8．谷尻遺跡	9．常の池古墳群	10．荒木山東塚古墳
11．荒木山西塚古墳	12．荒木城跡	13．小松東古墳群	14．小松寺跡	**15．小松遺跡**
16．立遺跡	17．小松西池遺跡	18．立１号墳	19．小松古墳群	20．小松城跡
21．小殿遺跡	22．小殿横穴群	23．小殿城跡	24．下村古墳	25．土井２号墳
26．定北古墳	27．定東塚古墳	28．定西塚古墳	29．矢の内遺跡	30．大谷１号墳

第２図　調査地周辺の地形と主要遺跡（1/25,000）

されている。これらの古墳の被葬者像には畿内政権と深い関わりをもつ高位な人物が推定されており、特に大谷１号墳の被葬者には吉備大宰石川王の可能性が指摘されている。また、山陰地域の影響を伺わせるものとして横穴墓があり、現在20数基が確認されている。[12]

古代の北房町域は備中国英賀郡６郷のうち中井郷・水田郷・呰部郷に相当し、中井郷が中津井地区、水田郷が上水田地区、呰部郷が呰部地区に比定される。このうち、水田郷すなわち上水田地区が英賀郡衙と推定される小殿遺跡[13]や備中北部唯一の白鳳寺院である英賀廃寺[14]の存在から、英賀郡の中心地と考えられている。集落の調査例には備中平遺跡があり、緑釉陶器や「吉祥」と記した墨書土器の出土から、識字能力をもち吉祥会を主催した有力者層の集落と考えられている。墳墓の調査例では桃山１号墳、山之城８号墳[15]で石室内に骨蔵器が追葬されており、地方における新しい葬制の受容のあり方を物語っている。桃山遺跡で検出された平安時代の火葬墓は、多数の副葬品から権門勢家の下にあった女性が死後改めて郷里で埋葬されたと推定されている。[16]

中世には山科家領の英賀荘が成立する。中世を特徴付ける城館跡は現在20数か所で確認されており、上水田地区南側の丘陵上にも小松城を始め荒木城、小殿城などが築かれている。[17]このうち谷尻遺跡赤茂地区[18]、植木遺跡[19]では発掘調査により溝で区画された多数の建物群や井戸が検出され、それぞれ四畝城、植木城に関連する武士の居館跡と考えられている。また、戦国時代～江戸時代末期には刀工国重一族が呰部地区、上水田地区で活躍し、多くの名刀を現代に残している。[20]これまでの発掘調査で検出された製鉄・鍛冶関係の遺構は備中平遺跡の古代炭窯・中世鍛冶炉、桃山遺跡の古代鍛冶炉、谷尻遺跡赤茂地区の中世鍛冶炉など数例であるが、町内には20数か所で鉄滓の散布が認められる[21]ことから、今後の調査によりその数はさらに増えるものと思われる。

以上、北房町内の遺跡について概略を述べた。今回調査の対象となった上水田地区の平野部はこれらの遺跡を支えた生産基盤として高く評価されてきた。しかし、その内容には不明な点が多く、今回の確認調査により初めて考古学的な調査のメスが入れられることになった。

註

(1)『岡山県の地名』日本歴史地名大系34　平凡社　1988年
(2) 栗野克己・井上弘・岡田博「備中平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12　岡山県教育委員会　1976年
(3) 高畑知功・山磨康平・井上弘・栗野克己「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　岡山県教育委員会　1976年
(4) 田仲満男「空古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　岡山県教育委員会　1976年
(5) 新納泉・尾上元規『定北古墳』　北房町教育委員会　1995年
(6) 二宮治夫・福田正継・竹田勝・田仲満男「桃山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12　1976年
(7) 坂本彰『岡山県上房郡北房町地蔵ヶ淵洞穴』　1983年
(8)『北房町史』通史編上　北房町教育委員会　1992年
(9)『定古墳発掘調査現地説明会資料』岡山大学考古学研究室定古墳発掘調査団
(10) 註(9)文献
(11) 近藤義郎・河本清「大谷１号墳」『北房町埋蔵文化財発掘調査報告』７　北房町教育委員会　1998年
(12) 註(8)文献
(13) 平井勝「小殿遺跡（英賀郡衙推定地）・英賀廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』38　岡山県教育委員会　1980年
(14) 註(13)文献
(15) 下澤公明「山之城古墳群」『北房町埋蔵文化財発掘調査報告』６　1987年
(16) 間壁葭子「岡山県下奈良・平安期に見る二・三の問題」『倉敷考古館研究集報』第16号　1981年
(17) 註(8)文献
(18) 森田友子・岩崎仁司「谷尻遺跡赤茂地区」『北房町埋蔵文化財発掘調査報告』４　1986年
(19) 田仲満男「植木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　1976年
(20) 註(8)文献
(21) 註(8)文献

第３章　発掘調査の概要

第１節　調査区の設定と調査方法

今回調査の対象となったのは北房町上水田南部地区のうち、備中川と中津井川の合流地点より下流の備中川右岸一帯の平野部と、備中川の支流である小松川両岸の狭長な谷部である。（第５図参照）

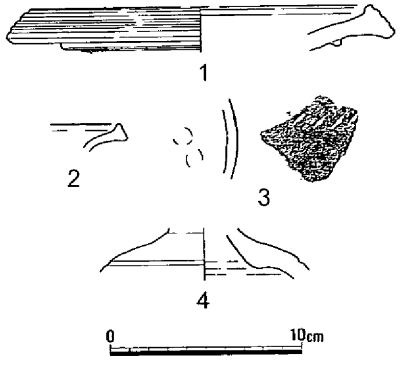
現在は丘陵裾部や備中川沿いの一部で宅地や工場が見られるほかは、ほとんどが水田や特産の黒大豆畑として利用されており、備中北部有数の穀倉地帯となっている。また、丘陵の谷筋には溜め池が多く築かれ、耕地の拡大と農業用水の確保に役立てられている。

圃場整備対象範囲は『岡山県遺跡地図』第二分冊（岡山県教育委員会　1974）、『全国遺跡地図　岡山県』（文化庁　1985）、『北房町史』通史編上（北房町教育委員会　1992）に掲載されている小松遺跡、立遺跡、小松西池遺跡、小松寺跡に隣接あるいは重複しており、丘陵裾部を中心に遺跡の存在が考えられるほか、現在の田面高から等高線を起こし微地形分析を試みた結果、備中川と中津井川の合流地付近から下流の備中川右岸一帯に微高地の存在が推定されたため、確認調査にあたっては圃場整備対象範囲全域に広くトレンチを設定し、遺跡の広がりと性格、包含層・遺構面までの深さ、面数などを確認することとした。

また、調査地内には第４図に示す通り、北から「谷尻（たんじり）」、「沖田（おきでん）」、「高下堂（こうげんどう）」、「常井尻（つねいじり）」、「大原新田（たいばらしんでん）」、「荒木（あらき）」、「大原（たいばら）」、「荒木小松尻（あらきこまつじり）」、「野添（のぞえ）」、「大柳（おおやなぎ）」、「高下ノ下（こうげのした）」、「廣光（ひろせ）」、「落方（おちかた）」、「一丁田（いっちょうでん）」、「分明寺（ぶんみょうじ）」、「鍛冶屋ヶ市（かじやがいち）」、「五代田（ごたんだ）」などの小字地名がある。

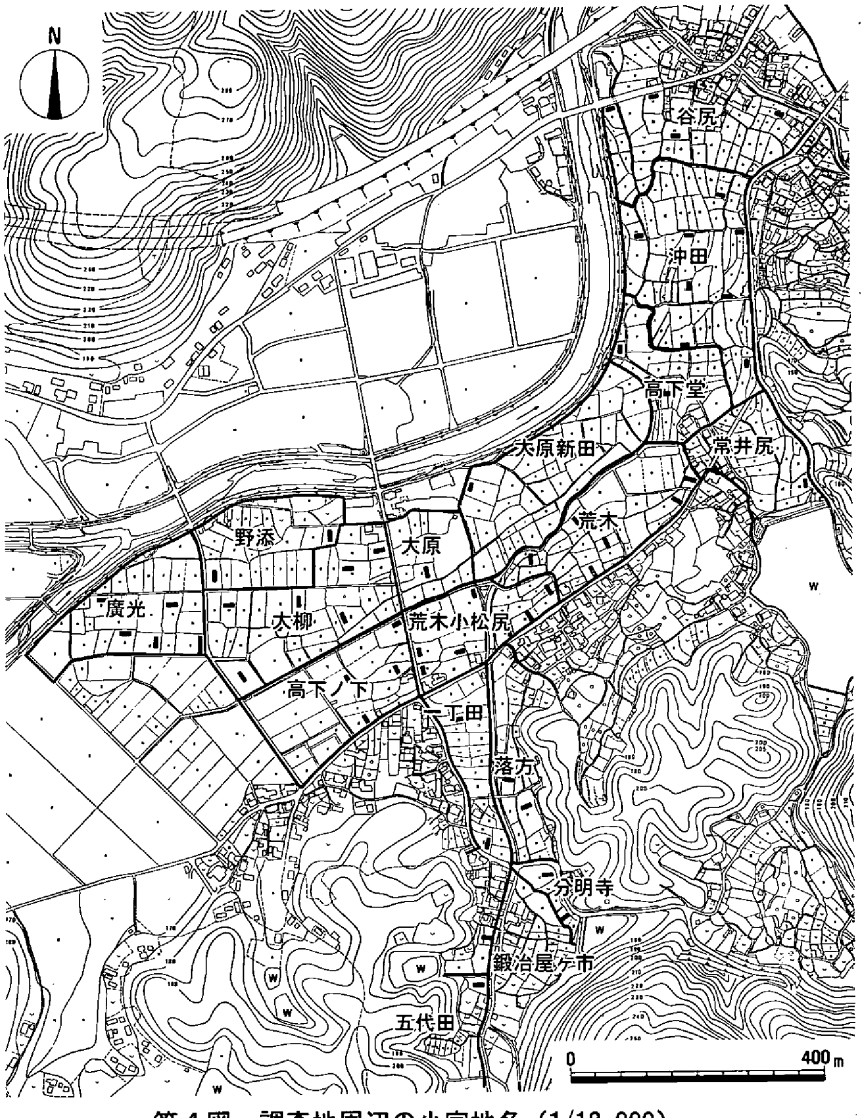
この呼称と境界が現在でも使用されていることから、トレンチの位置や遺跡の範囲を示す際にはこれを用いて表記することとする。

今回の圃場整備対象範囲のうち、平成９・10年度施工範囲となる「谷尻」・「沖田」・「高下堂」の一部・「常井尻」・「大原新田」・「高下ノ下」地区については、第１章第１節に述べた経緯により北房町教育委員会が確認調査を実施した。調査は北房町教育委員会主事三浦宮子氏が担当し、２×４ｍのトレンチ24か所、合計192㎡が調査された。調査の結果、遺構はいずれのトレンチからも認められず、遺物についてはトレンチＡから第３図に図示した遺物などが出土したほかは、皆無だったとのことである。



第３図　北房町教育委員会調査
トレンチＡ出土遺物（1/4）

第３図に図示した遺物のうち、**１**は壷の口縁部である。口唇部に４条の凹線文を施し、口縁部外面には１条の突帯を巡らしている。**２**は壷あるいは甕の口縁部である。端部を上につまみ上げ、断面は三角形状を呈している。**３**は壷の胴部である。胴部最大径のやや上部に板状の工具による連続刺突文を巡らせている。外面は横方向のヘラミガキが施され、内面



第４図　調査地周辺の小字地名（1/12,000）

には指頭圧痕が残る。４は礎の頸部から肩部で、肩部に１条の凹線が巡らされる。

このうち１は弥生時代中期後葉、２・３は弥生時代中期中葉、４は７世紀前半のものと考えられる。

トレンチＡからは、図示したものも含め、合計７点の弥生土器、須恵器が出土しているが、残りのものについては細片のため、図化し得なかった。

これらの遺物は遺構には伴なわず、周囲から流入した状況で出土したとのことで、トレンチＡの南側丘陵裾部に位置する立遺跡に関連するものと考えられる。

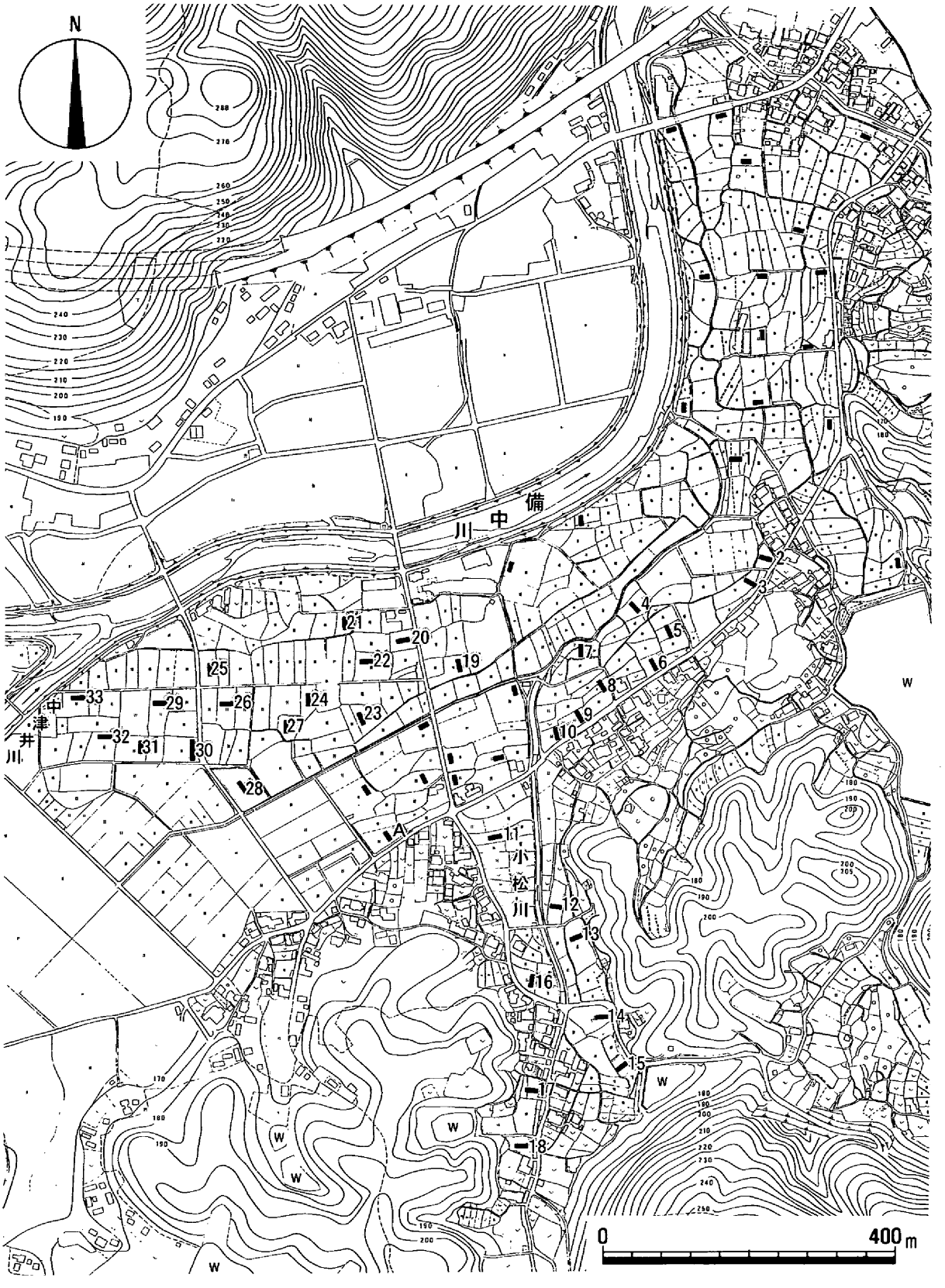
今回、岡山県教育委員会が実施した確認調査では、調査対象範囲の地形を参考に、33か所のトレンチを設定した。

その内訳は２×５ｍのものが32か所、２×10ｍのものが１か所で、調査面積は合計340㎡である。調査では掘り下げ・埋め戻しを人力で行い、排土は耕作土とそれより下層の土とを分別し、両者が混じらないように配慮した。埋め戻しは排土を数段階づつ分けて埋め戻し、石灰を散布するとともにランマーで叩き締めて旧状に復した。

第２節　調査の概要

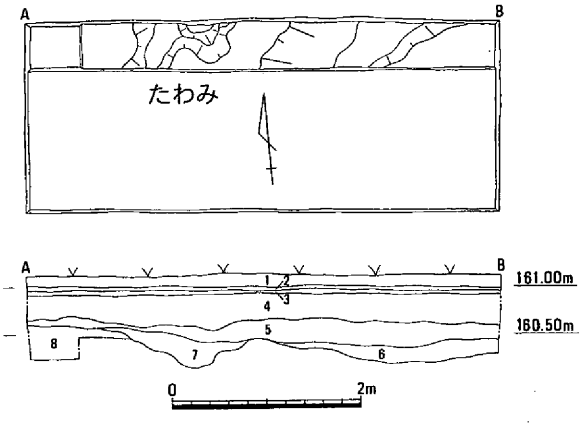
Ｔ-１（第６図、図版４-１）

高下堂地区に東西を主軸にして設定した。土層のうち、１～３は現代耕作土である。４層は暗灰色を呈す粘質土で、その下の５層との境には鉄分の沈着層が顕著に認められることから水田層と考えられる。遺物が出土していないため、時期ははっきりしないが層位から中世のものと考えられる。５・６層は砂質土で、備中川による洪水砂と考えられる。８は基盤層と考えられる粘質土で、作業量の関係からトレンチの北側50cmに限りこの層まで掘り下げを行った。その結果、８層を掘り込んだ不定形なたわみを１基確認した。たわみは断面と平面の一部で確認できただけなので正確な規模は不明であ



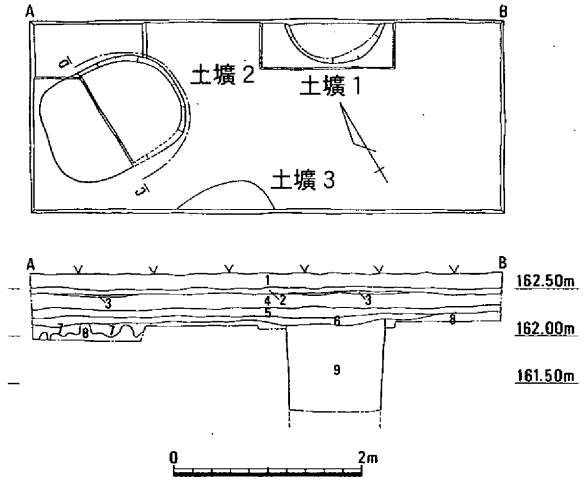
第５図　トレンチ配置図（1/8,000）　トーンは圃場整備範囲を示す。また番号のないトレンチおよびトレンチＡは北房町教育委員会が調査したトレンチを示す。

るが、検出面で直径約160cm、深さ30cmを測る。埋土は基盤となる８層とよく似ているが、炭粒がわずかに含まれている。時期は遺物が出土していないため不明である。まとめで後述するが、このトレンチの位置は南東の丘陵から派生した舌状台地が備中川に張り出した先端部分に位置していることから、周囲に比べ１段高い安定した基盤となっており、現在も宅地や畑として利用されている。こうした点からＴ－１では他に遺構は確認できなかったものの、この舌状台地上には古い時代の遺構が存在する可能性が考えられる。

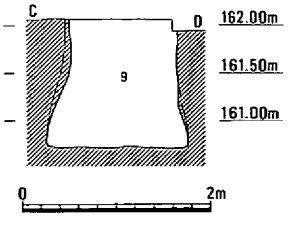


１．暗褐色土
２．暗青灰色土
３．灰褐色土
４．暗灰色粘質土
５．灰褐色砂質土
６．灰褐色砂
７．灰褐色粘質土（たわみ埋土）
８．淡灰褐色粘質土

第６図　Ｔ－１断面図（1/80）



１．暗褐灰色土
２．暗灰褐色土
３．褐灰色土
４．褐灰色粘質土
５．暗褐灰色粘質土
６．暗灰褐色粘質土
７．暗褐色粘質土（旧表土）
８．黄褐色粘質土
９．暗褐色粘質土と黄褐色粘質土が斑紋状に混じった土（土壙埋土）



第７図　Ｔ－３平・断面図（1/80）

Ｔ－２

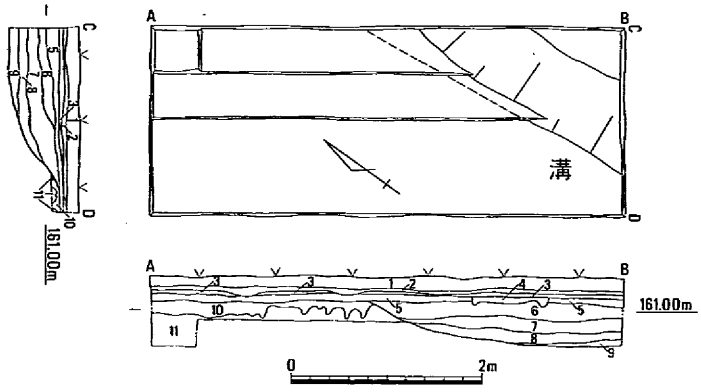
荒木地区に東西を主軸に設定したが、この一帯は近現代に全体が１ｍ以上造成されていて、人力では調査不可能であった。

Ｔ－３（第７図・図版２－１・２）

荒木地区に等高線に直行して設定した。１～３層は現代耕作土である。４～６層は古代～中近世の水田層と考えられ、須恵器の小片が出土している。８層は基盤層で、７層は８層に不定形に落ち込むような状況で堆積していることから旧表土と考えられる。

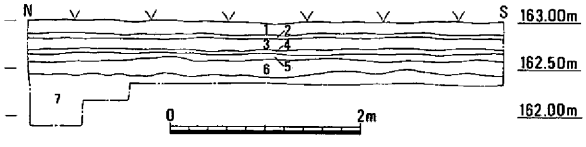
掘り下げは８層上面まで行い、この面で土壙３基を検出した。土壙１は検出面で直径105cmほどの楕円形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれている。トレンチの断面にかかっていることから完掘することができず、深さは不明である。遺物は出土していない。土壙２は土壙１の西120cmに位置する。検出面で長径140cm、短径110cmを測る長楕円形を呈する。土壙の掘り方は上部があまりすぼまらないフラスコ状を呈し、深さは130cmを測る。土壙底面は平坦に掘削され、底径150cmを測る。遺物は須恵器の細片が２点出土している。土壙３は土壙２の南60cmに位置する。土壙の一部を検出したのみで掘り下げは行っていないが、隅丸方形の平面形を呈するものと思われる。土壙１～３の埋土はいずれも７層と８層が斑紋状に混じり合ったもので、それぞれ数cmの大きなブロックになっていることから、掘削後あまり時間をおかず１度に埋められた状況が伺える。

これらの土壙の時期は土壙２から須恵器の小片が出土していることや、土壙が掘り込まれた



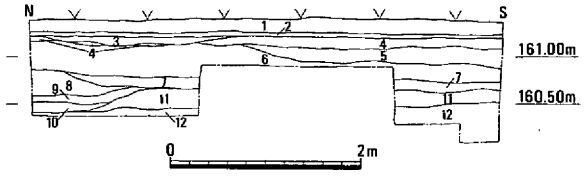
1．暗灰褐色土
2．褐灰色粘質土
3．灰褐色粘質土
4．灰色砂質土
5．褐灰色粘質土
6．暗褐色粘質土
7．暗灰褐色粘質土
8．暗褐灰色粘質土
（溝埋土）
9．褐灰色砂
10．褐色粘質土（旧表土）
11．黄褐色粘質土

第８図　Ｔ－４平・断面図（1/80）



1．暗褐灰色土
2．暗灰褐色土
3．暗灰色粘質土
4．灰褐色粘質土
5．灰色粘質土
6．灰色粘質土に黄褐色粘質土が混じった土
7．黄褐色粘質土（グライ化により、部分的に青灰色を呈する）

第９図　Ｔ－６断面図（1/80）



1．暗褐色土
2．暗赤褐色土
3．暗褐色土粘質土
4．黄褐色砂質土
5．褐色砂質土
6．灰褐色粘質微砂土
7．褐灰色粘質土
8．灰褐色砂
9．黒灰色砂
10．暗灰色砂
11．黒灰色粘質土
12．灰色粘質微砂土

第10図　Ｔ－７断面図（１/80）

層位から古墳時代後期～古代のものと考えられる。また、遺構の性格については断定できないが、その形態や密集して掘削されていること、埋土の状況などから基盤の黄褐色粘質土を採掘した粘土採掘穴と考えられる。[1]

Ｔ－４（第８図・図版２－３）

荒木地区に等高線に直行して設定した。１～４層は現代耕作土である。５層は瓦質の土器片が出土していることから中世の水田層と考えられる。11層は基盤層で、10層は11層に不定形に落ち込む様な状況で堆積していることから旧表土と考えられる。掘り下げは10層をやや掘り下げたレベルまで行い、10層上面で溝１条を検出した。

溝は10層から掘り込まれ、検出面からの深さは約45cmを測る。溝の掘り方の傾斜はなだらかで、底面はほぼ平坦に掘削されている。幅については肩口と底の一部を検出しただけなので不明である。また、この溝は南北方向に主軸をもつが、すぐ北側が低位部になることから、北方向への排水を意図して掘削されたものと考えられる。

埋土は４層に分層でき、最下層が砂層で、その上層に粘質土が堆積していることから、ある程度の期間機能した後、徐々に埋没していった状況が伺える。遺物が出土していないため時期は不明であるが、直上の層が中世に比定されることから、古代から中世のものと考えられる。

Ｔ－５

荒木地区に等高線に直交して設定したが、この一帯は近現代に全体が１ｍ以上造成されていて、人力では調査不可能であった。

Ｔ－６（第９図）

荒木地区に等高線に直交して設定した。遺構は認められなかったため土層のみ掲載している。１・２層は現代耕作土、３・４層は中近世の水田層、５・６層は古代の水田層と考えられる。７層は基盤層であるが、この一帯の地下水位が高いためか、ややグライ化している。遺物は３～６層から弥生土器、土師器、須恵器の細片が出土している。また、３層中から鉄滓が１点出土している。肉眼観察で

は鍛冶滓と思われ、付近に鍛冶関連の遺構が存在する可能性もある。

T－7（第10図・図版４－２）

荒木地区に等高線に直交して設定した。遺構は認められなかったため土層のみ掲載している。旧河道の近くに位置するため、洪水砂を幾度も被った状況が土層断面から伺える。このうち11層は黒灰色を呈す厚さ20cmほどの粘質土で、かなり古い時期の水田層の可能性が考えられるが、畦畔などは確認できなかった。遺物が出土していないため、各層の時期もはっきりしない。

T－8（第11図・図版４－５）

荒木小松尻地区に等高線に直交して設定した。遺構は認められなかったため土層のみ掲載している。１・２層は現代耕作土、３層は中近世の水田層、４層は基盤層である。遺物は３層から備前焼の小片が出土している。

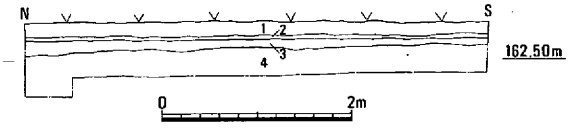
T－9（第12図・図版４－３）

荒木小松尻地区に等高線に直交して設定した。遺構は認められなかったため土層のみ掲載している。１・２層は現代耕作土である。３層は中近世の水田層、４・５層は古代～中世の耕作土の可能性が考えられる。６層は暗褐色を呈する粘質土で、**5**など古代の遺物を少量包含する。７層は基盤層である。

5は須恵器の杯蓋のつまみ部分である。**6**は５層から出土した土師質の小皿の底部である。底部はヘラ切りで、底径47mmを測る。このうち、**5**は奈良時代、**6**は室町時代のものと考えられる。

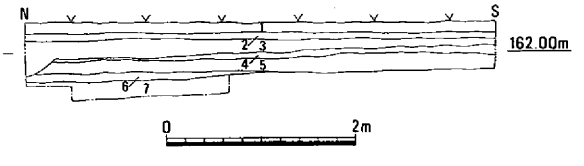
T－10（第13図・図版４－４）

荒木小松尻地区に等高線に直行して設定した。遺構は認められなかったため土層のみ掲載している。１・２層は現代耕作土である。３層はT－９の５層に対応し、古代～中世の耕作土と考えられる。４層はT－９の６層に対応し、古代の遺物を少量包含する。５・６層は基盤層である。**7**は須恵器の杯身の口縁部である。**8**は須恵器の杯身の底部で、底面は板状の工具によるナデで仕上げている。**9**は須恵質の小皿の底部である。底部の調整はナデによるもので、底径79.5mmを測る。時期はいずれも古代のものと考えられる。

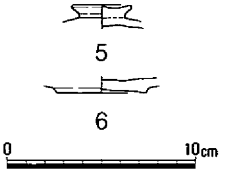


1．暗灰褐色土　　3．褐灰色粘質土
2．暗灰褐色粘質土　　4．淡黄褐色粘質土

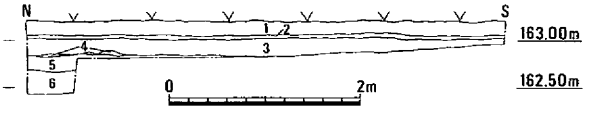
第11図　T－8断面図（1/80）



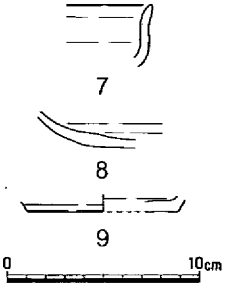
1．暗褐灰色土
2．暗褐灰色土
3．淡灰褐色粘質土
4．暗灰褐色粘質土
5．暗褐色粘質土
（黄褐色粘質土が斑紋状に少量含まれる）
6．暗褐色粘質土（包含層）
7．黄褐色粘質土



第12図　T－9断面図（1/80）・出土遺物（1/4）



1．暗灰褐色土
2．暗灰褐色土
3．灰褐色粘質微砂土
（黄褐色粘質土が斑紋状に少量含まれる）
4．暗褐色粘質土（包含層）
5．黄褐色粘質土



第13図　T－10断面図（1/80）・出土遺物（1/4）

T-11（第14図・図版４-５）

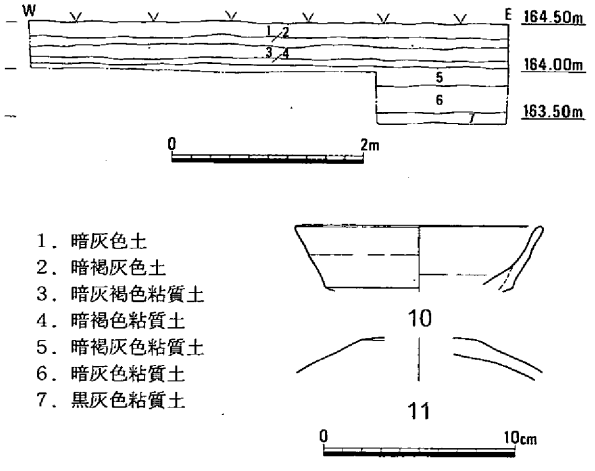
一丁田地区に東西を主軸に設定した。遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１・２層は現代耕作土である。３・４層は瓦質の土器片が出土していることや、層位から中世の水田層と考えられる。５層以下は下層ほど粘性の強いグライ化した土壌となっており、開墾される以前は湿地状を呈していたものと思われる。

遺物は３・４層から中世の遺物ともに、土師器や須恵器の細片が少量出土している。このうち、**10**は土師器の壷の口縁部で、口径126.5㎜を測る。磨耗が激しく、調整ははっきりしない。**11**は須恵器の杯蓋の天井部と考えられる。時期については**10**が４世紀代、**11**が７世紀前半と考えられる。

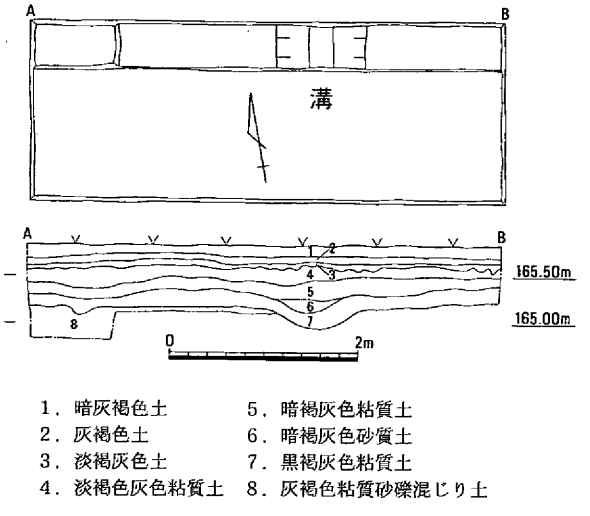
T-12（第15図・図版４-６）

落方地区に等高線に直行して設定した。１～３層は現代耕作土である。４層は亀山焼の小片が出土していることから中世の水田層と考えられる。５～７層は遺物が出土していないため時期がはっきりしない。８層は基盤層で、灰褐色を呈する粘性の強い土に径0.5～１cmほどの砂礫が多く含まれる。

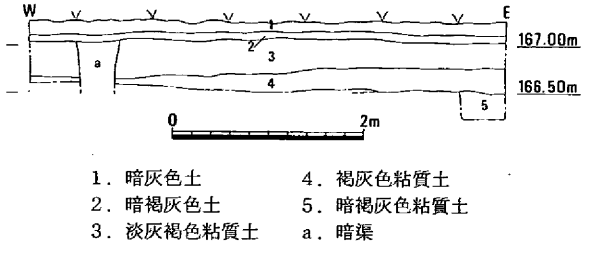
作業量の関係からトレンチの北側50cmに限りこの層まで掘り下げ、溝を１条検出した。溝はトレンチに直行しており、全長は不明である。断面形はなだらかなU字形を呈し、検出面で幅80cm、深さ20cm、底面の幅は25cmを測る。土層断面をみると、７層が溝に落ち込み、さらにそのくぼみに６層が堆積した状況を呈している。このため、溝は基盤層の８層を被覆していた７層上面から掘り込まれたが、あまり時間を置くことなく再び７層が流れ込み、埋没したものと考えられる。遺物が出土していないため、溝の時期は不明である。



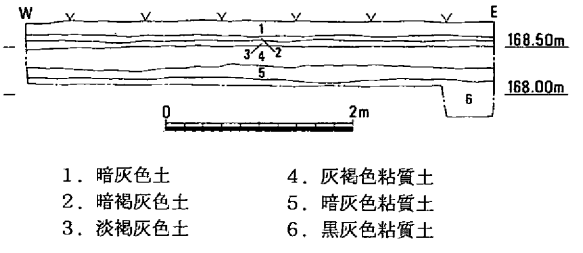
第14図　T-11断面図（1/80）・出土遺物（1/4）



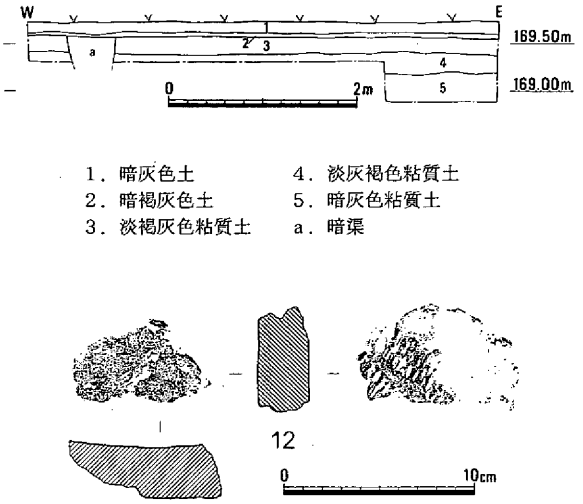
第15図　T-12平・断面図（1/80）



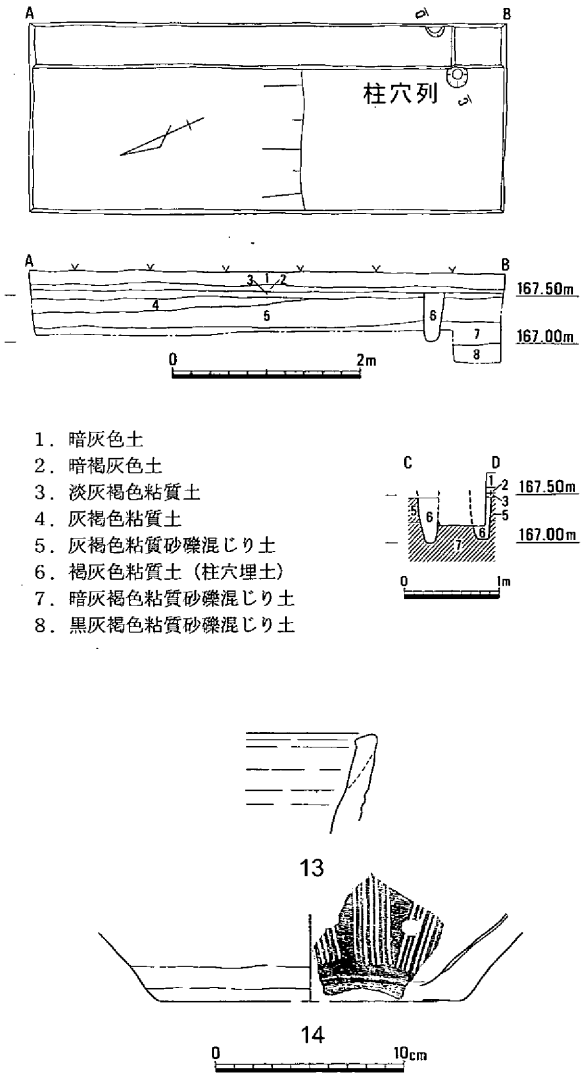
第16図　T-13断面図（1/80）



第17図　T-14断面図（1/80）



第18図　Ｔ-15断面図（1/80）・出土遺物（1/4）



第19図　Ｔ-16平・断面図（1/80）・出土遺物（1/4）

Ｔ-13（第16図）

落方地区に等高線に直行して設定した。遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１・２層は現代水田層である。３層は層位から中近世の水田層と考えられる。４層以下はグライ化した粘質土が堆積しており、開墾前は湿地状を呈していたものと考えられる。３層上面から暗渠が掘り込まれ、湧水が激しいことから掘り下げは５層上面で中止した。遺物は３層から土師質の土器片が少量出土しているが、細片のため図化し得なかった。

Ｔ-14（第17図）

分明寺地区に等高線に直行して設定した。

遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１～３層は現代耕作土である。４層は層位から中近世の水田層と考えられる。５層以下はグライ化した粘質土が堆積しており、開墾前は湿地状を呈していたものと考えられる。遺物は出土していない。

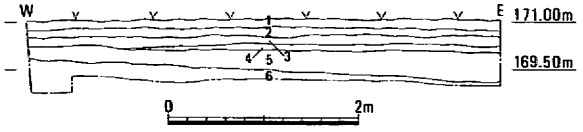
Ｔ-15（第18図・図版４-７）

分明寺地区に等高線に直行して設定した。遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１・２層は現代耕作土である。３層はＴ-14の４層に対応し、中近世の水田層と考えられる。４・５層はそれぞれＴ-14の５・６層に対応し、同様な堆積状況を示している。遺物は４層上面から須恵質の平瓦12が出土している。凹面には細かな布目痕が、凸面には縦位の縄目叩き痕が残る。厚さは約27㎜を測り、焼成は堅緻である。

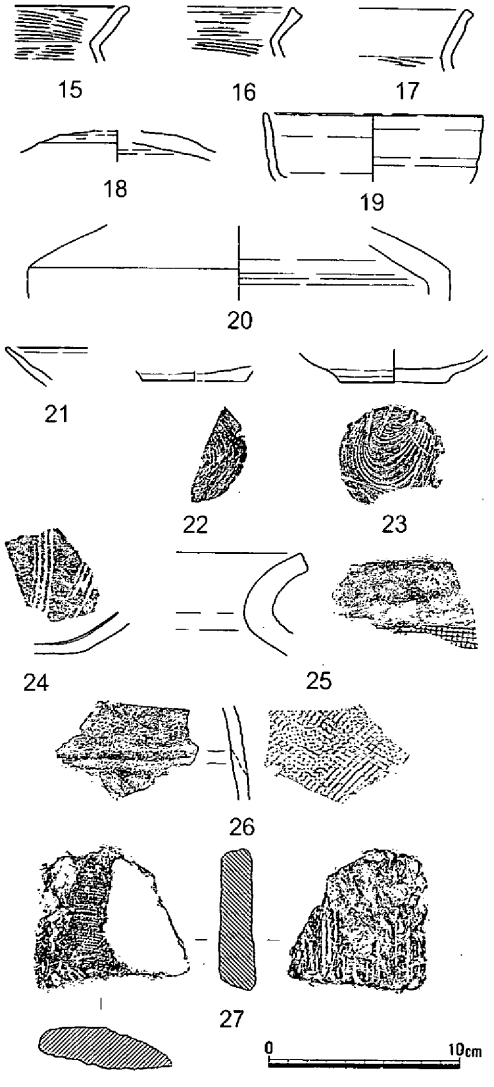
Ｔ-16（第19図・図版３-１）

一丁田地区に等高線に直交して設定した。

１・２層は現代耕作土である。３・４層は中近世の耕作土と考えられ、中世の遺物を少量包含する。５層は中世以降の基盤層で、丘陵部からの斜面堆積による、灰褐色を呈する粘性のつよい土に径0.5～１cmほどの砂礫が多く含まれる層である。７層以下も同様の埋土であるが、７



1．暗灰色土　　4．淡褐灰色砂質土
2．暗褐灰色土　　5．暗灰褐色粘質土（包含層）
3．淡黄褐色砂質土　　6．暗褐色粘質砂礫混じり土



第20図　T-17断面図（1/80）・出土遺物（1/4）

層の上面付近では弥生土器の小片が出土しており、この層以下に弥生時代以前の遺構が存在する可能性も考えられる。掘り下げは５層の上面まで行い、柱穴２基からなる柱穴列を検出した。柱穴列は主軸を東西にとり、その間隔は50cmを測る。柱穴の規模はいずれも検出面で直径約20cm、深さ約50cmを測る。埋土は単一で、柱痕跡は認められない。柱穴から遺物が出土していないため、時期ははっきりしないが、中世の遺物包含層である３層から掘り込まれていることから、中世以降のものと考えられる。

トレンチ全体では３・４層から鎌倉～室町時代前半の遺物が少量出土している。**13**は須恵質の大型壺の口縁部と考えられ、外面には２条の凹線が巡らされる。色調は黒灰色を呈し、焼成は堅緻である。**14**は備前焼擂鉢の底部で、底径159mmを測る。底部内面には20mmの幅で７本のカキ目が間隔を空けて放射状に施される。

T-17（第20図・図版４-８）

一丁田地区に等高線に直交して設定した。遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１～３層は現代耕作土である。４・５層は中近世の耕作土と考えられ、古墳時代～中世の遺物を包含する。６層は基盤層である。

遺物は５層を中心に出土している。**15～17**は土師器の甕の口縁部で、内外面はハケメで仕上げられる。**18**は宝珠つまみをもつ須恵器の杯蓋である。**19**は須恵器の無蓋高杯の口縁部である。**20**は須恵器の長頸壺の肩部である。**21**は瓦質の杯の口縁部である。**22・23**は土師器の小皿の底部である。底部は糸切りで、底径はそれぞれ56.5mm、56.0mmを測る。**24**は土師質の擂鉢である。底部内面には10mmの幅で４本のカキ目が間隔を空けて放射状に施されている。県内では北房町備中平遺跡、落合町赤野遺跡で出土例がある。[(2)] **25・26**は亀山焼の甕で、同一個体と考えられる。**27**は須恵質の平瓦である。凹面には細かい布目痕が、凸面には縦位の縄目叩き痕が残る。側面の一部が残存しており、ナデで仕上げられている。厚さは約20mmを測り、焼成は堅緻である。これらの遺物のうち、**15～17**は５世紀後半、**18・19**は７世紀前半、**20**は７世紀後半、**21～26**は鎌倉時代、**27**は古代のものと考えられる。

Ｔ-18（第21図）

五代田地区に等高線に直交して設定した。遺構は認められなかったため、土層断面のみ掲載している。１・２は現代耕作土である。３・４層は現代の撹乱で、しまりのない粘質土である。５・６層は基盤層でＴ-17の６層に対応する。遺物はほとんど出土していないが、３層より須恵質の平瓦**28**が出土している。**28**は側面が残存し、面取りが施されている。凹面には細かい布目が、凸面には縦位の縄目叩きが残る。厚さは約20㎜を測り、焼成は堅緻である。これらの特徴から古代のものと考えられる。

Ｔ-19（第22図）

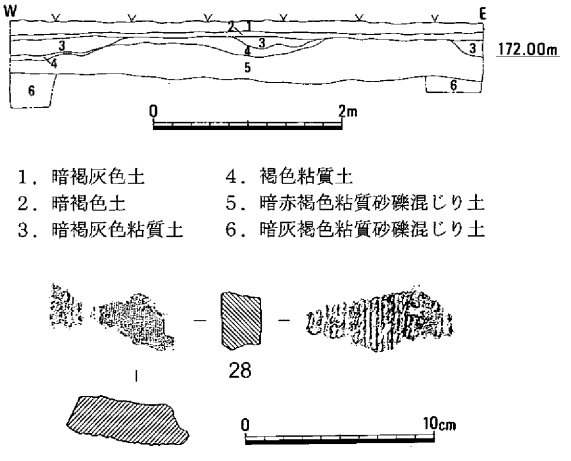
大原地区に南北を主軸にして設定した。遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１・２は現代耕作土である。３層は近代の造成土である。４層は近世の水田層と考えられ、５層以下は砂層が続いている。この一帯は備中川右岸の微高地に比べ一段低くなっており、南側の丘陵裾部との間にかつて河道が存在していたものと考えられる。遺物は出土していない。

Ｔ-20（第23図・図版５-１）

大柳地区に東西を主軸にして設定した。遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１・２は現代耕作土である。３・４層はマンガン粒を多く含むやや粘性をもつ砂質土で、備中川右岸に形成されている微高地の基盤となる層である。５層以下は砂質土が堆積している。遺物は出土していない。

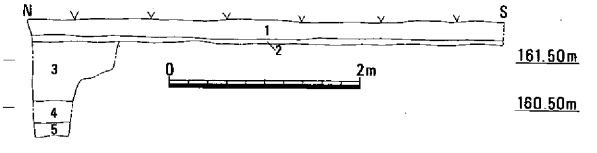
Ｔ-21（第24図）

野添地区に南北を主軸にして設定した。遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１・



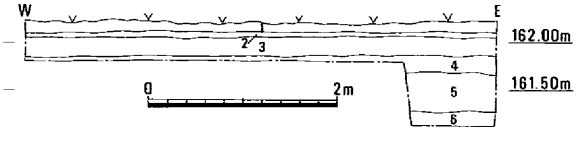
１．暗褐灰色土
２．暗褐色土
３．暗褐灰色粘質土
４．褐色粘質土
５．暗赤褐色粘質砂礫混じり土
６．暗灰褐色粘質砂礫混じり土

第21図　Ｔ-18断面図（1/80）・出土遺物（1/4）



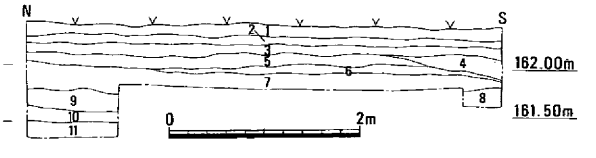
１．暗褐灰色土
２．暗褐色土
３．暗褐色砂（造成土）
４．黒灰色粘質土
５．黒灰色粘質微砂土

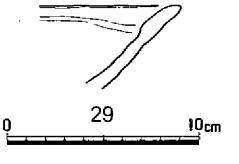
第22図　Ｔ-19断面図（1/80）



１．暗褐灰色土
２．褐灰色土
３．淡灰褐色粘質微砂土
（マンガン粒を多く含む）
４．灰褐色粘質微砂土
（マンガン粒を少量含む）
５．灰褐色砂質土
６．褐灰色砂

第23図　Ｔ-20断面図（1/80）





１．暗褐灰色土
２．褐灰色土
３．淡灰褐色砂質土
４．黄褐色砂質土
５．淡褐灰色砂質土
６．淡褐灰色砂
７．淡灰褐色粘質微砂土
（上面に鉄分沈着）
８．暗灰褐色粘質土
９．褐灰色粘質微砂土
10．淡褐灰色粘質微砂土
11．灰色粘質微砂土

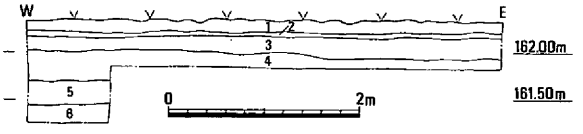
第24図　Ｔ-21断面図（1/80）・出土遺物（1/4）

２層は現代耕作土である。３層以下は備中右岸の微高地が形成されていく過程で堆積した洪水砂と考えられ、不安定な堆積状況を示している。このうち３層から29が出土している。８層は暗灰褐色を呈する粘質土で、微高地の核になる層と考えられる。29は浅鉢の口縁部である。口縁端部内面を20～25㎜ほどの幅で肥厚し、口唇部はやや尖り気味に仕上げられる。表面の調整は剥落のためはっきりしないが、外面には板状の工具で横方向にナデた痕跡が認められる。時期は縄文時代晩期前半と考えられる。

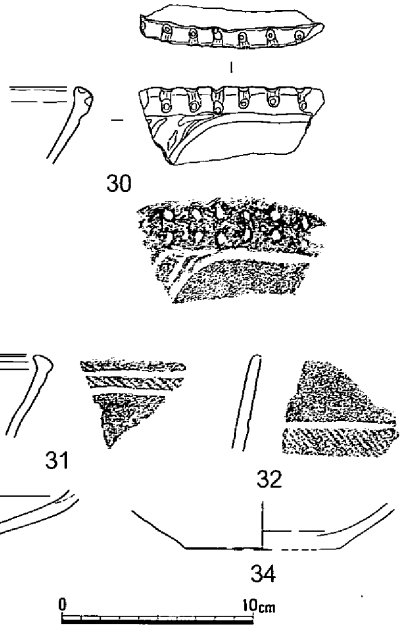
Ｔ-22（第25図・図版５-２）

大柳地区に東西を主軸にして設定した。遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１・２層は現代耕作土である。３層はマンガン粒を多く含むやや粘性をもつ砂質土で、４層とともに備中川右岸に形成されている微高地の基盤となる層である。５層以下は砂質土が堆積している。遺物は３層から５点出土している。

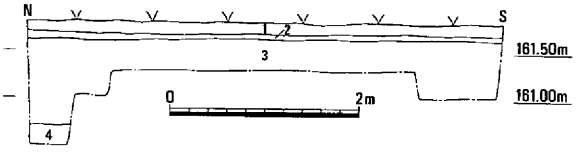
30は鉢の口縁部である。口縁端部をやや内側に折り曲げ、外面を肥厚している。肥厚部分には上面と側面から棒状の工具による刺突を1.3～1.5cm間隔で施し、さらに上下で対になる刺突間を浅い沈線で結んでいる。肥厚部分から下側には浅くて太い沈線文が施されるが、小片のため全体の文様構成は不明である。31・32は鉢の口縁部である。外面には細い沈線で区画されたＲＬの縄文が施される。33・34は浅鉢の底部である。これらの遺物はいずれも剥落が激しく調整ははっきりしない。このうち、30



1．暗灰色土
2．灰色土
3．褐色粘質微砂土
（マンガン粒を多く含む）
4．淡灰褐色粘質微砂土
5．褐灰色砂質土
6．淡褐灰色砂

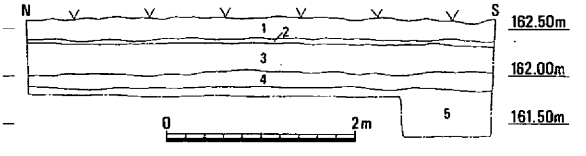


第25図　Ｔ-22断面図（1/80）・出土遺物（1/4）



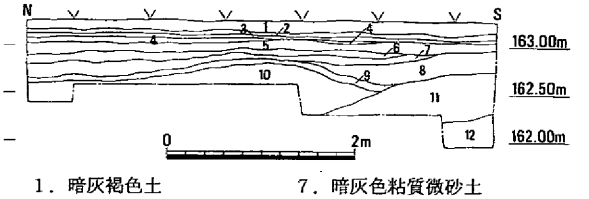
1．暗褐色土
2．暗灰褐色土
3．暗褐色砂（造成土）
4．黒灰色砂質土

第26図　Ｔ-23断面図（1/80）



1．暗灰色土
2．淡灰褐色土
3．淡灰褐色粘質微砂土
（マンガン粒を多く含む）
4．灰褐色粘質土
5．暗灰褐色粘質土

第27図　Ｔ-24断面図（1/80）



1．暗灰褐色土
2．灰褐色土
3．暗褐色砂質土
4．灰褐色砂質土
5．褐灰色粘質微砂土
（鉄分沈着）
6．暗褐灰色粘質微砂土
7．暗灰色粘質微砂土
8．暗褐灰色砂質土
9．褐灰色砂
10．灰色砂
11．暗褐灰色粘質土
12．黒褐灰色粘質土

第28図　Ｔ-25断面図（1/80）

は浅くて太い沈線文の技法から縄文時代中期末頃のものと考えられ、31～34は細い沈線で区画した磨消縄文の技法から縄文時代後期中葉と考えられる。

Ｔ-23（第26図）

大柳地区に東西を主軸にして設定した。遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１・２層は現代耕作土である。３層は近代の造成土で、４層以下は砂層が続いている。この一帯は備中川右岸沿いの微高地や南部の丘陵裾部に比べ一段低く、かつては河道だったものと考えられる。遺物は出土していない。

Ｔ-24（第27図）

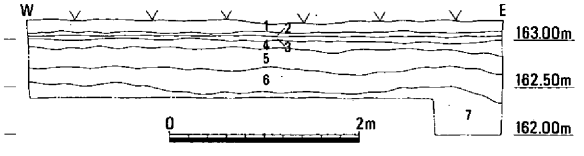
大柳地区に南北を主軸にして設定した。遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１・２層は現代耕作土である。３層はマンガン粒を多く含むやや粘性をもつ砂質土で、４層とともに備中川右岸に形成されている微高地の基盤となる層である。５層以下は粘質土が堆積しており、安定した堆積状況を示している。遺物は出土していない。

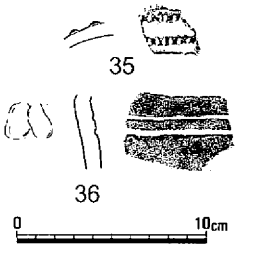
Ｔ-25（第28図）

野添地区に南北を主軸にして設定した。遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１・２層は現代耕作土である。３層～10層は砂質土で、備中右岸の微高地が形成されていく過程で堆積した洪水砂と考えられ、不安定な堆積状況を示している。11・12層は暗～黒褐灰色を呈する粘質土で、微高地の核になる層と考えられる。遺物は出土していない。

Ｔ-26（第29図・図版５-３）

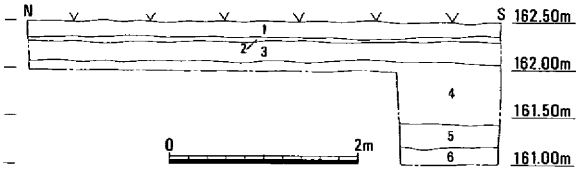
大柳地区に南北を主軸にして設定した。遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１・





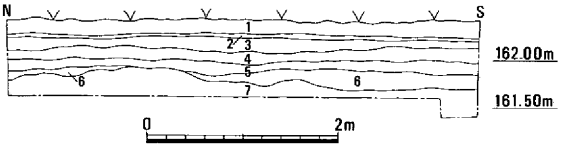
1．褐灰色土
2．褐灰色土
3．褐色粘質微砂土
（マンガン粒を多く含む）
4．灰褐色粘質微砂土
（マンガン粒を多く含む）
5．暗褐灰色砂質土
（炭粒を少量含む）
6．暗褐灰色砂質土
7．暗褐灰色砂

第29図　Ｔ-26断面図（1/80）・出土遺物（1/4）



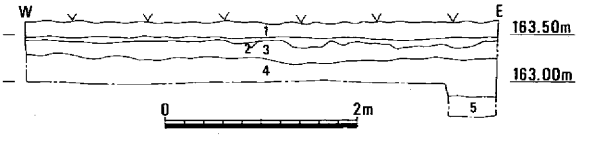
1．暗褐灰色土
2．暗灰褐色土
3．暗褐灰色砂
（造成土）
4．黒褐灰色砂
（造成土）
5．黒褐色粘質土
6．黒灰色砂

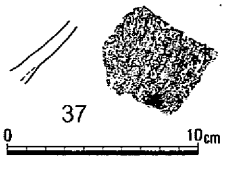
第31図　Ｔ-28断面図（1/80）



1．暗灰褐色土
2．暗灰色土
3．灰褐色粘質微砂土
（鉄分沈着）
4．褐灰色粘質微砂土
5．褐灰色砂質土
6．褐灰色砂
7．灰色砂

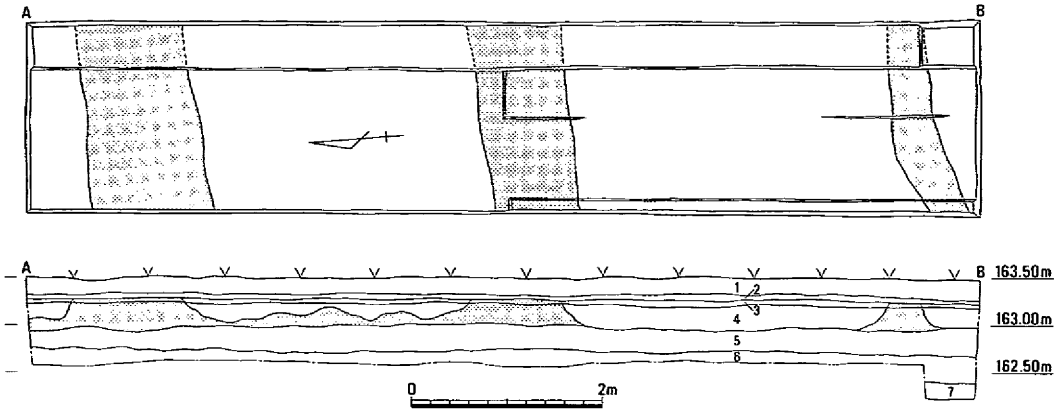
第30図　Ｔ-27断面図（1/80）





1．暗灰色土
2．灰色土
3．灰褐色粘質微砂土
4．淡灰褐色粘質微砂土
5．灰褐色砂

第32図　Ｔ-29断面図（1/80）・出土遺物（1/4）



1．暗褐灰色土　　2．褐灰色土　　3．灰褐色粘質微砂土　　4．灰褐色粘質微砂土
5．淡灰褐色粘質微砂土（マンガン粒を多く含む）　6．淡灰褐色粘質土　　7．暗灰褐色粘質土

第33図　Ｔ-30断面図（1/80）　トーンはマンガン粒の凝固が顕著に認められる部分を示す

２層は現代耕作土である。３・４層はマンガン粒を多く含むやや粘性をもつ砂質土で、備中川右岸に形成されている微高地の基盤層である。５層以下は砂質土が堆積している。このうち、５層中には炭粒が少量含まれることから、全体を６層上面まで掘り下げ精査したが遺構は認められなかった。遺物は４層と５層の境付近で**35・36**が出土している。**35**はラッパ状に大きく開く口縁部をもつ壺の口縁部内面に巡らす突帯の部分である。**36**は甕の肩部で２条の沈線を巡らしている。時期は**35**が弥生時代前期後葉、**36**が弥生時代前期中葉と考えられる。

Ｔ-27（第30図）

大柳地区に南北を主軸にして設定した。遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１・２層は現代耕作土である。３・４層はやや粘性をもつ砂質土で、備中川右岸に形成されている微高地の基盤となる層である。５層以下は砂質土が堆積している。遺物は出土していない。

Ｔ-28（第31図・図版５-４）

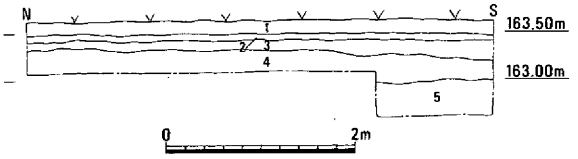
大柳地区に南北を主軸にして設定した。遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１・２層は現代耕作土である。３・４層は近代の造成土で、５層は造成前の近現代の水田層である。６層以下は砂層が続いている。この一帯は備中川右岸沿いの微高地部分や南部の丘陵裾部に比べ一段低く、かつては河道だったものと考えられる。遺物は出土していない。

Ｔ-29（第32図・図版５-５）

廣光地区に東西を主軸にして設定した。遺構は認められなかったため、土層のみ掲載している。１・２層は現代耕作土である。３・４層はやや粘性をもつ砂質土で、備中川右岸に形成されている微高地の基盤となる層である。５層以下は砂質土が堆積している。遺物は３層から**37**が出土している。**37**は深鉢の底部に近い部分と考えられ、外面には２枚貝による条痕調整を施している。時期は縄文時代晩期と考えられる。

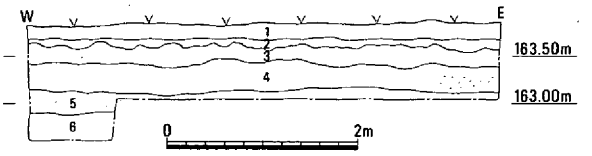
Ｔ-30（第33図・図版３-２・３）

廣光地区に東西を主軸にして設定した。１・２層は現代耕作土である。３・４・５層はマンガン粒を多く含むやや粘性をもつ砂質土で、備中川右岸に形成されている微高地の基盤となる層である。６層以下は粘質土が堆積しており、安定した堆積状況を示している。このうち、トレンチの南半を調査中、３層上面でマンガン粒の凝固が顕著に認められる範囲が帯状に認められた。その時点では、遺構



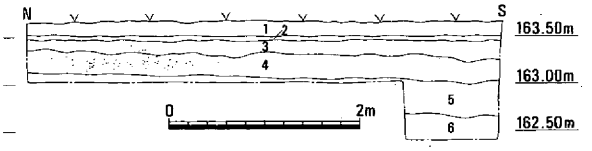
1．暗褐灰色土　　4．灰褐色粘質微砂土
2．褐灰色土　　5．暗灰褐色粘質土
3．褐灰色粘質微砂土

第34図　Ｔ-31断面図（1/80）



1．暗灰色土　　4．灰褐色粘質微砂土
2．灰色土　　5．灰褐色粘質土
3．淡灰褐色粘質微砂土　　6．暗灰褐色粘質土

第35図　Ｔ-32断面図（1/80）



1．暗灰色土　　4．灰褐色粘質微砂土
2．灰褐色土　　5．灰褐色粘質土
3．淡灰褐色粘質微砂土　　6．暗灰褐色粘質土

第36図　Ｔ-33断面図（1/80）

なのか自然現象によるものなのか判断できなかったため、トレンチを北に５ｍ拡張した。その結果、マンガン粒の凝固が顕著に認められる範囲が帯状に３条平行していることを確認した。３条の帯は東西に主軸を合わせ、ほぼ４ｍ間隔で平行している。帯の幅は北から約120cm、約100cm、約40cmを測り、断面による観察では５層に多く含まれるマンガン粒が、３層より上の層からの影響により吸い上げられた様な状況が認められた。こうした状況から、このマンガン粒の帯はかつて上層に存在した水田畦畔の下に何らかの土壌作用によって形成されたものと考えられ、その水田が削平された結果、畦畔の痕跡だけが下層に残されたものと判断した。県内では総社市南溝手遺跡の調査で同様な例が確認されている。[3] 遺物が出土していないため、水田の時期は不明である。また、トレンチ全体からも遺物は出土していない。

Ｔ-31（第34図）

廣光地区に南北を主軸にして設定した。１・２層は現代耕作土である。３・４層はやや粘性をもつ砂質土で、備中川右岸に形成されている微高地の基盤となる層である。５層以下は粘質土が堆積しており、安定した堆積状況を示している。遺物は３～４層から弥生土器と思われる細片が少量出土している。

Ｔ-32（第35図）

廣光地区に東西を主軸にして設定した。１・２層は現代耕作土である。３・４層はやや粘性をもつ砂質土で、備中川右岸に形成されている微高地の基盤となる層である。５層以下は粘質土が堆積しており、安定した堆積状況を示している。このうち、４層中にはトレンチの東端付近を中心に炭粒が少量含まれていたことから、全体を163.20ｍまで掘り下げ精査したが、炭粒が散漫に散布しているだけで人為的な状況は認めらなかった。遺物は３～４層から弥生土器と思われる細片が少量出土している。

Ｔ-33（第36図・図版５-６）

廣光地区に南北を主軸にして設定した。１・２層は現代耕作土である。３・４層はやや粘性をもつ砂質土で、備中川右岸に形成されている微高地の基盤となる層である。５層以下は粘質土が堆積しており、安定した堆積状況を示している。このうち、４層中にはトレンチの北半部分を中心に炭粒が少量含まれていたことから、全体を163.10ｍまで掘り下げ精査したが、炭粒が散漫に散布しているだけで人為的な状況は認めらなかった。遺物は３～４層から弥生土器と思われる細片が少量出土している。

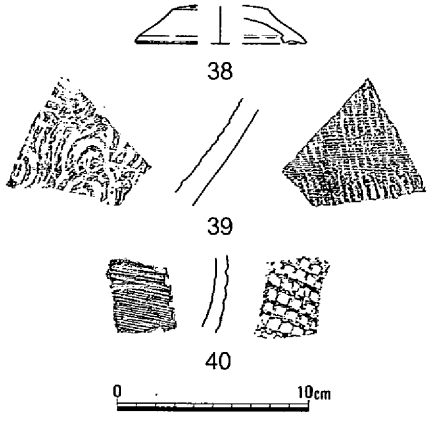
第4章 ま と め

今回調査した地点は、北房町上水田地区のうち備中川と中津井川の合流地点より下流の備中川右岸一帯の平野部と、備中川の支流である小松川両岸の狭長な谷部で、県営圃場整備事業の計画されている36.8haのうち、23.8haについて33か所、合計380㎡のトレンチを設定して確認調査を行った。

調査地周辺には周知の遺跡として小松遺跡、立遺跡、小松西池遺跡、小松寺跡が存在しており、調査の結果、これらの遺跡の範囲をほぼ把握することができたほか、新たに荒木地区の丘陵裾部一帯、備中川右岸沿い、小松川の流れる谷部で遺構・遺物を確認した。以下、これらの成果についてまとめる。(第38図参照)

まず、備中川右岸の平野部のうち、荒木地区の丘陵裾部では古墳時代後期から中世の遺構・遺物を確認した。この一帯は、中世以降の開墾により全体に削平を受けているようで、遺構はほとんど認められなかったが、全体の地形やT-3の粘土採掘穴、T-4の溝などの存在から、丘陵に沿って帯状に遺跡が広がっているものと考えられる。さらに、常井尻地区から高下堂地区では荒木地区の丘陵から派生する舌状の台地が北西にのびており、地形的にはこの台地上にも遺跡が存在する可能性が高いと考えられる。

また、備中川右岸沿いに微高地が形成されていることを確認した。微高地は備中川に沿って帯状に形成されており、その規模は幅約200m、長さ約700m以上と考えられる。この微高地はその基盤となる淡灰褐色～灰褐色を呈する粘質微砂土の中に、縄文時代中期末から弥生時代前期の土器が含まれていることから、この時期に形成されたものと考えられる。本来この層の上に弥生時代中期以降の遺跡が形成されていたはずであるが、調査では遺構・遺物とも認められなかった。その理由として、この一帯は昭和40年代後半にすでに圃場整備が行われていることから、この際に上層がすべて削平されてしまった可能性が考えられる。また、大原地区には中世に鋳物師の集落があったと伝えられるが[4]、今回の調査では金属滓や羽口など鋳造に関連する遺物は全く認められなかった。

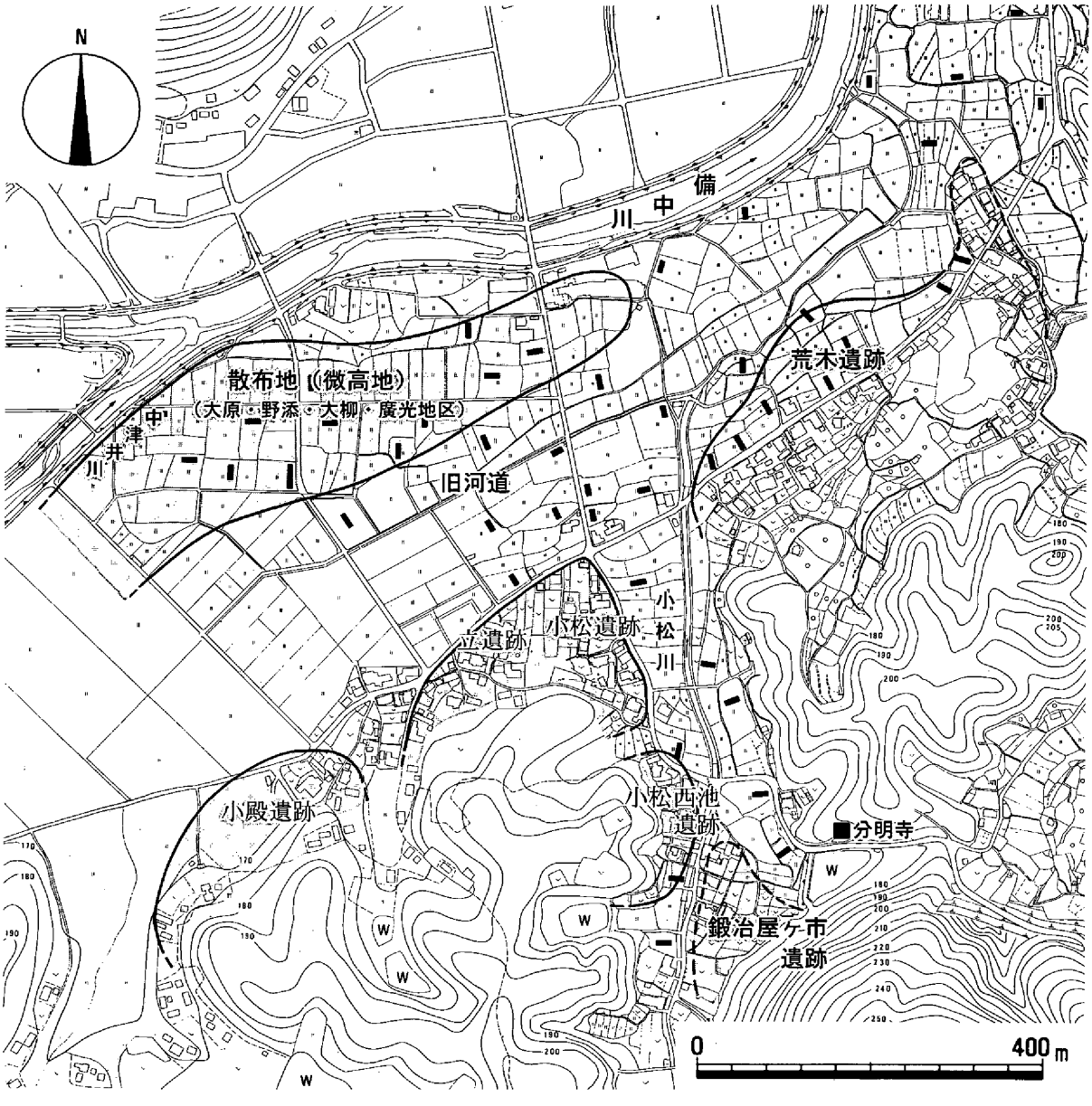


第37図 鍛冶屋ヶ市地区 周辺採取遺物 (1/4)

この微高地と先述の荒木地区との間には低位部があり、かつて河道が存在していたものと考えられる。

次に、小松川の流れる谷部の調査成果について述べる。このうち、小松川左岸の丘陵裾部には小松遺跡、立遺跡、小松西池遺跡が存在するが、調査の結果、その範囲は現在把握されている範囲より広がる可能性は少ないことが確認された。小松川両岸のトレンチでは耕土直下でグライ化した土層が堆積しており、開墾前は湿地状を呈していたものと考えられる。

また、分明寺地区のトレンチでは古代の瓦片が出土している。この一帯は以前から布目瓦の出土が知られ、小松寺跡として周知されていた。今回の調査の結果、この一帯についても耕土直下でグライ化した土層が堆積しており、寺



第38図　遺跡推定範囲図（1/8,000）　明朝体は周知の遺跡であることを、ゴシック体は今回新たに確認した遺跡であることを示す。

院が立地するような土壌ではないことが確認された。出土した瓦も小片で表面は剥落が激しいことから、周囲から流入したものが出土したと考えられる。こうした状況から、付近の丘陵上に古代の小堂あるいは瓦窯が存在していたものと思われるが、具体的な手がかりは得られなかった。そのため、第38図で小松寺跡の範囲を示すことは差し控えた。なお、T-14・15の西側の丘陵上には現在分明寺という小堂が存在するが、それとの関係も不明である。

また、今回の調査にあたり周辺を踏査した結果、鍛冶屋ヶ市地区で遺物を採取した。この一帯は南東の丘陵から延びる舌状の台地となっており、現在も宅地や畑地として利用されている。採取遺物のうち、38は須恵器の杯蓋、39は須恵器の甕、40は亀山焼の甕である。圃場整備範囲外のため、調査は行っていないが、これらの遺物と地形からこの一帯にも古墳時代後期～中世の遺跡が存在する可能性が高い。

以上、調査成果についてまとめたが、今回調査を行った面積は調査対象面積の0.0016%に過ぎず、

確認できた遺跡の範囲はあくまでも推定である。また、調査した深さについても地表面から－1～－1.5mに限られ、遺構が確認されていない地点でも、深い位置に古い時期の遺構面が存在する可能性は大いにある。

最後に遺跡の名称について触れておく。岡山県では原則としてその遺跡の所在する小字名を冠して遺跡名としている。今回の調査の結果、新たに確認された遺跡についてもこれに従い、荒木地区の丘陵裾部一帯を荒木遺跡、鍛冶屋ヶ市地区の丘陵裾部一帯を鍛冶屋ヶ市遺跡とする。また、備中川右岸に形成されている微高地については遺構は確認されなかったものの、その基盤層中に遺物が含まれることから散布地として理解することができるが、同じ微高地上に異なる小字が多く存在するため、今回は散布地としてその範囲を示すだけで特定の遺跡名は付けていない。正式な遺跡名については今後の調査において改めて検討する必要があるであろう。

註

(1) 粘土採掘穴の例として県内では古墳時代前期では倉敷市矢部奥田遺跡、古代では長船町西谷遺跡、中世では岡山市北方地蔵遺跡などがある。粘土採掘穴の形態はその土地の土質が大きく関係しており、形態から時期を推測するのは困難であるが、今回検出した粘土採掘穴は形態的には矢部奥田遺跡のものに類似している。
浅倉秀昭ほか「矢部奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82　岡山県教育委員会　1993年
福田正継ほか『西谷遺跡』 長船町教育委員会　1985年
岡田　博ほか「北方地蔵遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126　1998年

(2) 栗野克己ほか「備中平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12　1976年
橋本惣司ほか「赤野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』3　岡山県教育委員会　1973年

(3) 平井泰男ほか「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100　岡山県教育委員会　1995年
ただし、南溝手遺跡で確認されている水田は畦畔の下層に鉄分が沈降したもので、今回検出したマンガン粒が凝固した畦畔の痕跡とはその成因が異なる。

(4)「大原の鋳物師」『北房町史』通史編上　北房町教育委員会　1992年

第1表　トレンチ調査概要一覧表

調査区	遺構・包含層の有無	遺構・包含層の海抜高	表土からの深さ	遺物	
				量	時期
T-1	たわみ（1基）	160.60m	50cm	×	－
T-2	－	－	－	×	－
T-3	土壙（3基）	162.10m	50cm	△	古墳～古代
T-4	溝（1条）	161.10m	30cm	×	－
T-5	－	－	－	×	－
T-6	－	－	－	△	弥生～古代
T-7	－	－	－	×	－
T-8	－	－	－	△	中世
T-9	包含層	161.80m	60cm	△	古代～中世
T-10	包含層	162.80m	40cm	△	古墳～古代
T-11	－	－	－	△	古墳
T-12	溝（1条）	165.20m	70cm	△	中世
T-13	－	－	－	△	古墳～古代
T-14	－	－	－	×	－
T-15	－	－	－	△	古代
T-16	柱穴列	167.50m	20cm	△	中世
T-17	包含層	169.70m	30cm	○	古墳～中世
T-18	－	－	－	△	古代
T-19	－	－	－	×	－
T-20	包含層	162.10m	20cm	×	－
T-21	包含層	162.20m	20cm	△	縄文
T-22	包含層	162.20m	20cm	△	縄文
T-23	－	－	－	×	－
T-24	包含層	162.30m	30cm	×	－
T-25	包含層	163.00m	20cm	×	－
T-26	包含層	163.00m	20cm	×	弥生
T-27	包含層	162.20m	20cm	×	－
T-28	－	－	－	×	－
T-29	包含層	163.40m	20cm	△	縄文
T-30	包含層	163.20m	20cm	×	－
T-31	包含層	163.40m	20cm	△	弥生
T-32	包含層	163.60m	20cm	△	弥生
T-33	包含層	163.40m	20cm	△	弥生

※遺物量は整理箱半分以上を◎、整理箱1/3程度を○、それ以下を△、なしを×で示している。

図版１

１．調査地遠景①
（北西から）

２．調査地遠景②
（北東から）

３．調査地遠景③
（南から）

図版２

１．Ｔ－３全景
（南東から）

２．Ｔ－３土壙２
（東から）

３．Ｔ－４溝
（北西から）

１．Ｔ-16全景
（西から）

２．Ｔ-30全景
（北西から）

３．Ｔ-30
畦畔痕跡検出状況
（西から）

図版４

１．Ｔ－１北壁たわみ周辺（南から）

２．Ｔ－７東壁北半（西から）

３．Ｔ－９東壁（西から）

４．Ｔ-10全景（南西から）

５．Ｔ-11北壁東半（南から）

６．Ｔ-12北壁溝周辺（南から）

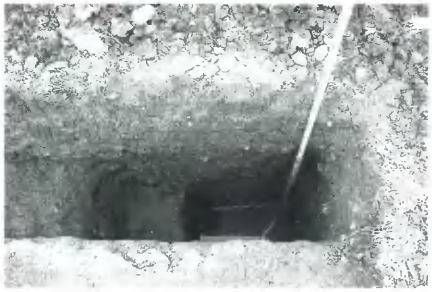
７．Ｔ-15北壁東半（南から）

８．Ｔ-17北壁（南から）

１．Ｔ-20全景（南東から）

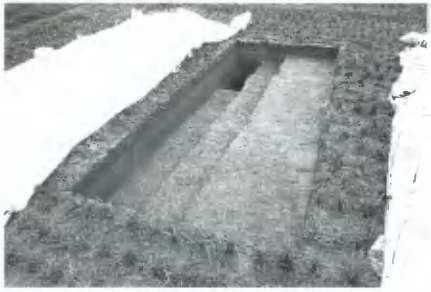
２．Ｔ-22北壁西半（南から）

３．Ｔ-26全景（南西から）



４．Ｔ-28東壁南半（西から）

５．Ｔ-29全景（南西から）



６．Ｔ-33全景（南西から）

７．作業風景（Ｔ-30　北東から）

８．埋め戻し風景（Ｔ-17　南西から）

図版６

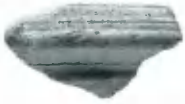
30

31

32

29

36


1

23

13

25

14

27

24

12

出土遺物（1/2）

報 告 書 抄 録

ふりがな	こまついせきほか
書名	小松遺跡ほか
副書名	県営北房町圃場整備事業に伴う確認調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	146
編著者名	佐藤寛介
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0316 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
こまついせき 小松遺跡ほか	おかやまけん 岡山県 じょうぼうぐん 上房郡 ほくぼうちょう 北房町 かみみずた 上水田	33522		34° 57′ 25″	133° 38′ 50″	1998.10.8～12.2	340m²	県営圃場 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小松遺跡ほか	集落	縄文時代～中世	土壙・溝・柱穴	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・亀山焼・備前焼・瓦	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告146

小松遺跡ほか

県営北房町圃場整備事業に伴う確認調査

平成11年３月23日　印刷
平成11年３月31日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325－3
発行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2－4－6
印刷　ワシュウ印刷株式会社
岡山市当新田381－3